

愛すべき観光立国ギリシャ

It's all Greek to me!?

山崎 崇

「It's all Greek to me」という英語の慣用語を「存知だろうか。直訳すれば「私にとっては全てがギリシヤ語（Greek）に聞こえる」となるが、シユークスピアが戯曲の中でギリシヤ語の難しさを表現するために用いたことから、現在では「ちんぷんかんぷんだ」という意味で使われる。滞在した数日間「It's all Greek to me」思わず口に出してしまうことをごっくかご紹介した。

観光立国ギリシヤ

ギリシヤと聞いて、パルテノン神殿などの遺跡や世界遺産、青いエーゲ海と白い建物、ヘラクレスなどが登場するギリシヤ神話、ソクラテスに代表されるギリシヤ哲学、オリンピック発祥の地など多くのものを連想できると思う。ヨーロッパ文化のゆりかごとも称されるほど、歴史や遺跡といった面で観光資源には事欠かない。また、周辺諸国のパカンス滞在先としてエーゲ海の島々は人気が高い。ギリシヤを訪れる日本人旅行者は年間約五万人と決して多くはないが、世界各地からは年間約千六百万人が訪れ（国際観光到着数）、世界十五位である。また、海外旅行者が宿泊、飲食、国内交通、買い物等に支払う費用としての国際観光収入は年間約百四十億米ドルで、世界十二位である。さらに、GDPに占める国際観光収入の割合は約5%と、世界でも有数の観光立国といえる。日本と比較してみると、国際観光客到着数、国際観光収入ともギリシヤは日本の約倍で、国際観光収入のGDPに占める割合では日本の二十倍以上である。（出典は表参照）

アテネ周辺の観光都市群

昨年五月末、遺跡巡りを目的にアテネなどのギリシヤ国内の教都市を訪れる機会に恵まれた。ギリシヤの首都アテネには歴史の教科書でもおなじみのパルテノン神殿など数多くの遺跡や博物館があり、多くの海外旅行者で賑わっている。まちの中に遺跡があるというよりも、遺跡の中にまちがあるという表現の方が適切に感じるほどアテネのまちは遺跡に溢れている。また、古代アゴラと呼ばれる遺跡のすぐ脇を地下鉄の列車が走る光景を目にすることもできる。なお、この地下鉄の工事中に大量の文化遺産が発掘され、駅構内にその一部が展示されている。

▼表 海外旅行関連データ(2006年)

	日本	ギリシヤ
国際観光客 ¹ 到着数(100万人)	7.3	16.0
国際観光収入 ¹ (10億米ドル)	8.5	14.3
国内総生産 ² (名目GDP, 10億米ドル)	4375.5	307.9
国内総生産に占める国際観光収入	0.2%	4.6%

出典：*1-世界観光機関(UNWTO)暫定数値
*2-総務省統計局

アテネから自動車で二、三時間程度の範囲内にはミケーネ遺跡やコリント運河、古代ギリシヤでは世界の中心「大地のへそ」として考えられていたデルフィの遺跡、巨石群とその頂上にギリシヤ正教の修道院が立つ世界遺産メテオラなど魅力

的な観光資源を持つ都市が多く存在する。急いで周遊しても一週間では足りないと感じさせられるほどの充実ぶりである。



▲遺跡のすぐ脇を駆け抜ける地下鉄の列車

観光立国であるのにも関わらず、海外旅行者が「It's all Greek to me. (ちんぷんかんぷんだ)」と思わず口に出してしまうことをいくつかご紹介したい。

スト好きなギリシヤ人

まずは、世界中から多くの観光客を集める、アテネのシンボルでもあるパルテノン神殿でさえも監視スタッフなどのストライキにより入場できないことがある。ギリシヤは非常にストライキやデモ行進が多い国であり、海外旅行者が多く訪れる遺跡や世界遺産であっても、お構いなくストライキは始まってしまおう。また、ある島で偶然遭遇したデモ行進はみんな



▲偶然遭遇したデモ行進

で集まって散歩しているようなのかなもので特に困ることはなかった。しかし、交通機関、電力会社、ゴミ収集車などありとあらゆるものがストライキになるようである。なお、帰国翌日には観光バスドライバー労働組合のストライキが予定されていた。

ストライキほどではないが、ある博物館では職員不足を理由にひとつの展示室の前にロープを張り入場を制限し、来館者が非常に遠くからしか展示物を眺めることができなかったこともあった。入場制限の理由を尋ねると、職員不足であるという日本では考えにくい理由を悪びれることなく堂々と回答するあたりもギリシヤ人の自己主張の強さを感じさせるものであった。

ギリシヤのトイレ事情

ギリシヤを訪れる海外旅行者が最も驚かされるのは使用後のトイレトペーパーを流すことができないことではないだろうか。下水管が細いため紙が詰まってしまうというのがその理由である。ほとんどのトイレにはペダルペール（足踏みペダルで開閉するゴミ箱）が備え付けられており、使用後の紙はそこに捨てることになる。

アテネオリンピックを契機にインフラ整備を進め近代都市化を遂げたアテネの新しい街地、その中の高級ホテルであってもお決まりのペダルペールが置いてあることは、ここがヨーロッパの中の観光地であることを忘れさせてしまう。紙を流せない理由には処理場の処理能力の低さという説もあるようだが、どちらにしてもギリシヤの人々はあまり不便を感じていないようである。下水道が整備されている古代遺跡が存在するのにも関わらず、現代では紙を流すことができないというのも本当に神秘に満ちた国である。

セルヒドなギリシヤの別荘について

まちを歩いたり、移動の際の車窓から不思議に感じる建物を目にするのがあ



▲3階に拡張する予定があるのか？

それは二階の柱が鉄筋むき出しであるのに一階部分が平然と使用されている建物。また、建物の柱や梁という基本的な部分は完成しているのに、ドアやガラスサッシをつけて部屋として使われているのは一部だけという建物もよく目にした。店舗や集合住宅などでも見かけたが、この不思議な建物が最も多いのは別荘であるようだ。別荘の所有率は高く、平均的な所得の家庭でも別荘を持つことは珍しくない。ただし、日本の住宅のようにローンを組んで一気に建てるのではなく、貯めた資金の分だけ建てながら使用していくのがギリシヤ流の別荘のつくり方である。また、工事費を抑えるために自らが施工をしたり、現場監督を務めたりすることも少なくない。そのため、一見すると工事中であるのに人が生活している不思議な建物を数多く目にするのできる。

ギリシヤのまちの魅力

「It's all Greek to me」と感じた後に何故だか「ギリシヤらしい」と自然に納得してしまう。温暖な気候やギリシヤ人特有のおおらかさだけでなく、遺跡がまちの中にきちんと残されていることなどのまちの魅力が海外旅行者を穏やかな気持ちにしてくれるのかもしれない。次回訪れる際にはギリシヤのまちの魅力をより深く探してみたいと感じることのできた有意義な滞在であった。